

法華寺旧境内の調査(平城第514次)

今回の調査区は、現在の法華寺境内の南方、平城宮東院庭園の東方にあたり、奈良時代の法華寺の南東隅に位置します。すぐ西側では大規模な石敷の苑池等が見つかり、光明皇后の一周忌がおこなわれた阿弥陀浄土院とされています。周辺ではこれまでの小規模な調査でも、太い掘立柱の根元や奈良三彩の瓦が見つかっており、どのような建物が展開していたのか注目されてきました。昨年度におこなった第501次調査では、数期におよぶ掘立柱建物を発見しており、今回は、この成果をもとに7カ所におよぶ調査区を設定しました。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物や瓦溜り等の遺構が見つかり、大型の掘立柱建物が建ち並んでいたこと等があらかになりました。しかし、部分的な調査にとどまったため、具体的な建物規模や配置まであらかにすることはできませんでした。奈良時代の遺物としては、とくに南寄りで緑、白、褐色に彩られた奈良三彩の瓦が多く出土しました。軒平瓦は同じ坪でこれまで出土しているものと同型式のものでした。また、奈良三彩の鬼瓦も出土し、平城宮に準ずる三彩瓦葺きの建物があった可能性が高まりました。更に、今回の調査では室町時代後半頃から江戸時代の溝が、この地域を取り囲むように巡ることもわかりました。溝の堆積土からは「かわらけ」と呼ばれる土師器の皿や箸、漆器、曲げ物、下駄等生活用品が多数出土し、この周辺に集落が形成されていたことがあらかとなりました。平城宮周辺での集村化の実態を考えるうえで、きわめて重要な発見といえます。

(都城発掘調査部 神野 恵)



瓦溜り(南西から)